仁平義明編『嘘の臨床・嘘の現場』（至文堂、現代のエスプリ　481：2007）

コラム

嘘は女性の方が上手か

仁平義明
佐藤拓

「あなたは私が好きだったんでしょ」
「知ってたんですか」
「女にはわかるのよ」
「私もあなたが好きだったわ」
「気がつきませんでした」
「女は隠せるのよ」

『外国の陰謀』（一九六六　アメリカ映画）和田　誠『お楽しみはこれからだ―映画の名セリフ・PART3』六四―六五　文藝春秋　一九八〇

女は男より、嘘がうまいし、嘘に敏感で見破るのもうわてだとよくいわれる。そうだろうか。

どんな場合に嘘をつくかは、いくつかの研究で共通する性差が報告されている。それは、私たちは社会で期待される性役割に沿った嘘をつく傾向があり、とくに男性は恐怖を感じている場合に、恐くないと言ってしまう嘘が女性より多くなるという結果である（仁平　二〇〇六）[2]。

自分をよく見せようとする嘘の頻度は、その傾向を検出するための性格検査の嘘尺度得点では、ほとんど性差がない（同）。

どんな嘘や裏切りをゆるし・ゆるさないかとなると、どの研究でも結果はほとんど一致している。男は身体的な不貞をゆるさない傾向があり、女は精神的な不貞をゆるさないという、〝常識的な〟結果である。

たとえば、アメリカのシャッケルフォードたち（二〇〇三）[3]は、大学生男女に、いくつかの質問をした。

①どちらの方が、あなたを動揺させ、苦しめますか？

（A）パートナーが、だれかと熱烈な性行為を楽しんでいるのを想像する

（B）パートナーが、だれかに感情的な結びつきをつよく示すのを想像する

◇結果―男性は（A）が六一・九％、女性は（B）が七八・〇％

②どちらの方が、あなたにはゆるしがたい行為ですか？

（A）パートナーが、だれかと熱烈な性行為をした

（B）パートナーが、だれかに感情的な結びつきをつよく示した

◇結果―男性は（A）が六五・一％、女性は（A）が五二・〇％

ただ、もともと嘘と裏切りの話なのだから、結果を信じたために、どんなことが起こるかは保証の限りではない。

さて問題の、嘘の発見能力と嘘の見破られやすさの性差である。結果は研究間で錯綜している。

「嘘をついたときの変化」の性差では、嘘が何かにあらわれやすければ、嘘はばれる可能性が高くなる。アリゾナ大学のジュディ・バーグーンたちの研究[1]結果の例を紹介しよう。彼女たちは、嘘について三つの実験を行ったが、その二番目が、インタビューで嘘を言うときに、嘘のタイプによって身体的な指標や言語的な内容、あるいは声のピッチや強弱などの指標がどう変化するかを分析した実験である。三つのタイプの嘘が条件として設けられた―①偽りを言う嘘（fabrication）、②ぼかす嘘（equivocation）、③言わない嘘（concealment）、である。男性は、②ぼかす嘘のとき、他の二種類の嘘のときより、声のピッチが有意に低下した。〝口ごもる〟というが、まさにそうである。女性は、逆に、②ぼかす嘘のとき、ピッチが上昇した。男性は、②ぼかす嘘のときに、言葉の感情表現が低下したが、女性は三つの場合とも、感情表現のゆたかさは保たれていた。

たしかに、こうした結果は面白いのだが、性差による効果は、嘘での行動の変動（分散）の一〇％以下のものしか説明できないことを、バーグーンたちは指摘している。また、他の多くの研究で結果は不一致であることが多い。

バーグーンたちは、嘘の見破り能力についても先行研究を総合評価している。これまでの研究をみると、女性の方がわずかに嘘を見破る割合が高いという結果もあることにはあるが、そう結論してよいほど一貫した結果ではない。女性が嘘はうわてだという考えは、確かな事実とはいえない。

もし、女の方が嘘をつくのも見破るのも上手だという神話をつくり出したのが男たちであり、そうすることで男女社会の安定をはかろうとしたのなら、嘘つきとしては男がうわてである。

〔引用・参考文献〕

（1）Burgoon, J. K. et al. 1998 Sex differences in presenting and detecting deceptive messages. D. J. Canary & K. Dindia (Eds.) *Sex differences and similarities in communication: Critical essays and empirical investigations of sex and gender in interaction.* Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. pp. 351–372.

（2）仁平義明　男の嘘・女の嘘　箱田裕司、仁平義明編『嘘とだましの心理学―戦略的なだましからあたたかい嘘まで』一九九―二〇〇頁　有斐閣　二〇〇六

（3）Shackelford, T. K., Buss, D. M., & Bennett, K. 2002 Forgiveness or breakup: Sex differnces in response to a partner's infidelity. *Cognition and Emotion*, 16, 299–307.

〔にへい・よしあき　東北大学大学院文学研究科心理学講座教授〕
〔さとう・たく　東北大学大学院文学研究科博士後期課程〕